

表紙絵解題

## X線の中国伝来

内田慶市

本号の表紙絵は、「寶鏡新奇」(『点石齋画報』利三、光緒年)と題された中国で最初に導入されたレントゲン(X線)の記事のものである。

自泰西格致之術精，而鏡之为用大。千里鏡可以洞远也，显微镜可以析芒也，岂惟是古鏡照人妍媸莫遁哉。不謂犹出愈奇，更有烛及幽隱者。苏垣天赐庄博习医院西医生柏乐文，闻美国新出一种宝鏡，可以照人脏腑，因不惜千金购运至苏。其鏡长尺许，形式长圆，一经鉴照，无论何人，心腹肾肠昭然若揭。苏人少见多怪，趋而往观者甚众。该医生自得此鏡，视人疾病即知患之所在，以药投之，无不沉痾立起。以名医而又得宝鏡，从此肺肝如见，药石百灵，借彼光明同登人寿，其造福于三吴士庶者非浅。语云：“欲善其事，先利其器。”西医精益求精，绝不师心自用，如此宜其技之进而益上也。

(ヨーロッパの格致の術の進歩により、たとえば鏡の用途も実に大きいものがある。望遠鏡は遠くまで見通すことができるし、顕微鏡はかすかなものまで見分けることができ、昔の鏡のように人の美醜を照らすだけのものではなくなっている。ますます奇想天外なものが現れることは言うまでもなく、暗い所まで照らすものまである。さて、蘇州の博習医院=現在の蘇州大学附属第一病院の西洋医の William Hector Park (=アメリカ Methodist Episcopal Church) は、アメリカで新しく人の臓器を映すことの出来る魔法の鏡が作られたことを聞くと、大金を惜しまずに購入し、それを蘇州まで搬入した。その鏡は、長さは一尺余り、楕円形で、それで照らせば、如何なる人であろうと、心臓、腹、腎臓、腸などがはっきりと手に取るように見えるのである。蘇州ではこうした不思議なものはめったにないので、多くの人がそれを見に集まった。その医者はその鏡を手にしてからは、病気を診るにも、その病んでいる所在をたちどころにつかんで投薬が出来るようになり、重い病気も治らぬ者はいなくなった。まさに、名医が宝の鏡を得ることにより、ものの真情をつかみ、薬石百効、みな仁寿に登れるようになり、三吳=蘇州、常州、湖州の民に多くの福をもたらしたのである。「その事に善くせんと欲せば、先ずその器を利すべし」とはこのことである。西医は、絶えず進歩を求め、独りよがりにはならず、まさにかくのごとく、ま

すまずその技の向上に努めているのである。)

レントゲン (X線) はドイツの物理学者、ヴィルヘルム・レントゲンによって 1895 年に発見されたものであり、その功績によって彼は第一回のノーベル賞を受賞しているが、その 2 年後にはすでに中国に入ってきていることがこの記事から分かる。



< 図 1 >

図 1 は「剖脳療瘡」(『点石齋画報』利三=1897)と題された「脳外科手術」の紹介記事である。

美国纽约有一女子名秀菘者，年二十有九，家贫性至孝，借佣工以养其寡母。母女二人相依为命。比来此女忽得暗疾，其患在脑，遂如倍尔佛佑医院求治于好意脱医生。该医生固外科圣手也，视之谓曰：“此病脑中有疮，须用刀剖开脑壳，将毒取出，方保无虞；否则，必不救也。”秀菘初尚犹豫，继恐一旦不讳，寡母无人供养，因决计听医所为。初服蒙药，后昏迷不省人事。好意脱医生即以破脑之针，破其右边脑旁一孔，取出脑旁一小骨，复易以一细针，针旁有刀可割者，由所破之孔深入，取出如豆大之脑一粒，验之脑中果有毒疮，一如所言。幸此疮仅如浓浆，尚未凝结，其质尚软，不必用刀割割，但以温水喷灌入内，其毒患从右边针破之孔流出，俟毒流尽，一经洗涤，疾即霍然。未几秀菘果如梦醒，便开口问曰：“老母何在？”一若绝无所苦者。医生之技，不亦神乎！

（アメリカのニューヨークに一人の女性がおり、年は 29 歳、家は貧しいが、極めて孝行な娘で、メイドをしながら母を養っていた。母と娘は互いに寄り添って生きていたが、突然、娘は人に言えないような、頭の病気を患ってしまう。そこで、ホイット先生の診察を受けに病院に行った。この先生は、神の手を持つ外科医であるが、診察してこう言った。「この病気は頭の中に腫瘍があり、頭を切開して毒を取り出さないと、救う方法はない。」娘は、初め、もしそのまま死んでしまったら母を養う人がいなくなるということで躊躇したが、医者と言うとおりにすることを決めた。まず、麻酔薬を飲むと、もう後は意識がなくなった。医者はすぐに脳を開ける針を持ち、右の脳に一つの穴を開け、その小さな骨を取り出し、また、そこで細い針に取り替え、破った穴から深く中に入れて、豆粒大の脳の一部を取り出して中を見ると果たして腫瘍があった。幸い、この腫瘍はまだのり状のもので固まっておらず、メスで切り取る必要はなく、温水を管に流し込んで右の脳に開けた穴から流し出すだけでよかった。ほどなく、娘は夢から覚めたかのように、こう問うた。「お母さんはどこ？」全く痛みもないようで、医者の技は、まさに神がかりと言うべきである。）

モリソン来華以降、欧米の宣教師は「医療伝道」にも心を尽くし、多くの名医（伯駕=Peter Parker, 合信=Benjamin Hobson, 雒魏林=William Lockhart, 徳貞=Dudgeon John など）が派遣され、各地に教会病院が作られ、これが、たとえば徐寿などの中国人との協力関係の下で、近代の中国における医療事業の中心・基盤となった。「徳貞」などは、日本人の作った中国語教科書の『官話指南』などにもその名が登場してくる。

当時の中国の医術のレベルを示す記事としては、『点石齋画報』には、この他にも、「剖腹出児」（竹九=1892）では「帝王切開」の記事が、「妙手割瘤」（御一=1895）では、お腹の大きな腫瘍摘出手術のこと、あるいは「収腸入腹」（子二=1887）でも、五臓が飛び出した人を直す手術のことが描かれている。また、『格致彙編』や『教会新報』、『申報』などには、しばしば西洋医学の紹介記事が載せられている。してみると、当時の中国の医療技術はかなりの先端を行っていたことが窺い知れるのである。

## 国際シンポジウム「近代東アジアにおける文体の変遷——形式と内実の相克を超えて」

